先輩に続け

米国駐在経験から思うこと

米国トヨタ販売 副社長
平田 英二（ひらた えいじ）

私は1982年に工学部機械工学科を卒業しトヨタ自動車（株）に入社しました。以来一貫して品質を軸に仕事をしています。昨年入社30年を迎えましたが、都合4回、通算10年以上米国に駐在しています。米国はトヨタにとって非常に大切で大きな市場でありますが、米国だけ4回目駐在というキャリアは社内でも珍しいと思っています。

ケンタッキーへの赴任

一番最初の米国駐在は1988年、トヨタにとっては北米初の本格的な米国生産拠点となったケンタッキー工場への赴任でした。当時は工場の生産開始直前で、各業務毎にベテランの課長クラスと育成候補である若手との組み合わせで日本人をコーディネーター（業務指導員）として派遣していました。その若手として派遣され、米国での生活を含め様々な経験をさせてもらいました。

当時、通商摩擦真っ盛りで日本車をとり巻く環境は極めて厳しく、本格的な米国生産の開始は当時のトヨタとしては大変大きな挑戦でもありました。このケンタッキー工場の成功こそが、その後のトヨタのグローバル化の大きな礎となったことは間違いありません。

成功の鍵はいくつかありますが、やはり品質がその最大の要素と思っています。当時は米国人がきちんとした車を作りこめるのか漠然とした不安がありました。トヨタとしては、あえて日本流のやり方を愚直に持ち込み現場でその良さを〝現地現物〟で米人社員に教え込みました。当時の日本人社長は常に作業服を着て、社員食堂で作業者と一緒にランチを取り、駐車場も社長スペースはなくオフィスまで大きな声で挨拶をしながら歩いていました。そういった地道な取り組みが、〝トヨタは違うな、皆で考えて改善していこう〟という一体感につながったと思います。

結果、米人社員との連携で日本の品質に負けない品質の車を出荷することができ、その後の米国生産またグローバルでの現地生産拡大につなげることができました。その後、当時のベテラン、若手のコーディネーターが世界各地の現地生産関係の主要ポストを担い、またトヨタ本体の社長、副社長を含め多くの経営幹部を輩出しています。私自身もその後3回も米国に駐在しているわけで少しは会社と米国にご恩返しができたかなと思っています。

その後ロスアンゼルスへ

その後は今回を含め3回、ロスアンゼルスの拠点で、いずれも市場品質情報を扱う仕事をしています。直近の2回は広大な北米で発生する様々な品質情報を現地現物で迅速に確認して対策につなげる機動部隊を企画して自分で動かしてきました。

後輩へのアドバイス

さて今回は、先輩に続けとのタイトルですので、なぜ自分が当時選抜されたのか考えてみて後輩へのアドバイスとしたいと思います。まずは英語です。これはいうまでもありません。次に希望の見える化です。入社以来海外で活躍したい希望を持っており、機会がある毎に上司に申し出ていました。上司が理解しないと次のステップに進めません。3番目は自分でチャンスを掴む事。私の場合、26歳のとき初めて4ヶ月、米国出張させてもらいましたが、チャンスと思い張り切って仕事をしました、現地の米人とすっかり仲良くなり、現地の上司から大変評価されました。その後、その人が部長になって自分の上司となり、2回目の駐在を決めてくださいました。

現在トヨタには60名を超える徳島大学出身の社員が様々な部署で活躍しています。トヨタの役員や部長をされた先輩もたくさんいらっしゃいます。後輩の皆さんには先輩に続けではなく先輩を大きく超える活躍を期待しています。

略歴 Profile

出身地：愛知県	
1982年3月	工学部機械工学科卒業
1982年4月	トヨタ自動車工業（当時）入社
1988年1月	Toyota Motor Manufacturing,USA, Inc.（当時）勤務
1997年1月	Toyota Motor Sales, USA, Inc.勤務
2005年1月	Toyota Motor Manufacturing & Engineering, USA, Inc.勤務
2013年1月	Toyota Motor Sales, USA, Inc. Vice President Product Quality & Service Support 担当

徳大生大活躍！

［取材］Gakuseiru Kodaisei

総合科学部 人間文化学科 2年
武知 実波
（たけち みなみ）

世界に羽ばたく「阿南ふるさと大使」人生の波乗りも楽しむ

本年3月、徳島県阿南市は初代「阿南ふるさと大使」を我が徳島大学の武知実波さんに委嘱。続いて水野雄仁さん（元巨人投手、プロ野球解説者）、旺季志ずかさん（脚本家）、大高翔さん（俳人）、笑福亭学光さん（落語家）が委嘱されました。

山有り海有り、豊かな自然と文化、先進の産業に恵まれた阿南。武知さんがその魅力を発信するのは海です。

「意外と思うかもしれませんが、阿南は世界のサーファーも注目する良い波が来る海なんです」

武知さんは小学4年生でサーフィンを始め、アマチュア時代は「ISA（国際サーフィン連盟）世界ジュニア選手権大会」ガールズクラスに、日本代表として4年連続出場。高校生で（2011年）JPSAのプロトライアルに一発合格。この年の「JPSAルーキー・オブ・ザイヤー」も獲得。サーフショップを営むご両親ももちろんサーファー。お父さんは今年の全日本サーフィン選手権で準優勝しています。弟さんも精力的に試合に出場しており、姉弟共に生粋のコンペティション（競技）サーファーです。使うボードはお父さんが作製しており、武知さんを全面的にサポートしています。

JPSA公認プロサーファーとして、世界の大会に出場するだけでなく、練習も欠かすことは出来ません。

JPSAに所属する現役プロサーファーで現役の女子大学生は珍しく、国立大学初の「サーフィンクラブ」を同好会として立ち上げ、正式な部への昇格を目指し、ほとんどがサーフィン初体験の部員の指導にも当たっています。このように多忙なスケジュールの中、学生生活との両立は並大抵ではありませんが、子どもの頃から文武両道で努力する決意を持っていました。

「年に2～3か月は海外遠征があります。通常の日でも、学校と練習にと大変ですが、サーフィンを勉強が出来ない言い訳にしたくないんです。もちろん周りの方たちの理解や協力があったから頑張ってこられました。試験と試合が重なったときは、先生方が配慮して下さったり、本当にありがたいです」

「プロの世界は厳しいですが、世界ツアーを転戦することで様々な経験を積み、同時に大学での勉強を通して自分を高めていきたいと思います」

世界トップクラスのサーファーを目指して、今は限りある時間を最大限に有効活用して頑張っています。

将来は、大学在学中に積んだ経験を活かして、社会、サーフィン業界に自分しかできない方法で貢献していきたい、と目を輝かせています。WQS世界ランキングは61位。武知さんは来シーズンを見据えて今日も海に向かいます。

サーフィン豆知識

日本には、国内中心の「日本プロサーフィン連盟（JPSA）」と、世界組織の日本支社として「ASP JAPAN」という二つのプロ組織があります。ASP（アソシエーション・オブ・サーフィン・プロフェッショナル）にはWCTとWQSというリーグがあり、WQS（ワールドクオリファイイングシリーズ）での上位17人がWCT（ワールドチャンピオンシップツアー）参加資格を得て世界トップを競います。

好きなサーファー米国の
Courtney Conlogueと

阿南ふるさと大使委嘱式
岩浅市長と

2011年度ルーキーオブ
ザイヤーのトロフィー

南アフリカBianca Buitendag（左）
フランスJohanne Defay（右）と